学校給食
教育としての学校給食

星名久美子

学校で一番好きな時間は何？と聞くと「給食時間！」と元気に答える子どもたち。子どもたちが大好きな学校給食も物価高騰で献立内容に影響を及ぼしています。そして今、葛飾区・北区・品川区など子育て支援や家庭の救済として給食費を無償化する自治体が増えつつあります。学校給食の献立は教育としての要です。地域の食材を活用して考案する和食献立や、家庭科で学習し子どもたちが考えた献立・給食委員が作成した献立などは、元気になるための栄養補給だけでなく、生きた教材として給食時間に登場します。研究員が少ない部会ですが、このような各校特色ある教育としての学校給食が、今後も広がる事を願いながら議論を深めています。

広がる学校給食の合理化

二〇一七年二月都内2地区に於いて刻みのりを媒介とした食中毒が発生しました。自校直営の小平市は2校とも被害者は30人前後で、原因究明後はすぐに学校給食を再開しました。一方、立川市の委託且つセンター給食では7校の小学校で1000人を超える被害者を出しました。原因究明後も、パート従業員の賃金補償問題等で、なかなか給食を再開する事が出来ませんでした。せめて卒業生に給食をという声で、三月卒業式前に一日だけ給食を提供しました。このように事故があった場合、センターでは多くの犠牲者を出す事、委託では子どもに対する行政の責任が曖昧である事等が立証されています。しかし、合理化は更に進み、今、企業が一括管理するPFI方式を導入する自治体が増えてきており、立川市もその一つです。「立川のおいしい給食を実現する会」主催の講演会に於いて、PFI方式は収益優先の企業が一括管理する事から、子どもたちの命と健康を管理する行政としての責任が更に希薄になる等、様々な問題がある事も学習してきました。教育であるべき学校給食には、民間への依存を強化した合理化が広がっています。

教育としての学校給食の在り方

部会で追及している事は「子どもを主人公とした学校給食とは？」です。食の課題を抱えて入園・入学して来る子どもたちが年々増えています。学校や保育園では集団での学びがとても大切ですが、保育園では集団保育から個人保育へ重点をおいてきています。子どもたちがひとりの人間として尊重され、一人ひとりの子どもたちに寄り添った給食が提供される事。その為には、子ども目線に立った食の環境を作っていく事が重要です。教育としての学校給食の在り方はどうあるべきか。献立内容や栄養教諭の位置づけ、合理化問題等も含め、立場を超えた議論が必要ではないかと思っています。子どもたちが眼を輝かせて給食を待ち、人としての豊かな営みが出来る。部会では、このような教育としての学校給食の在り方を追及し続けています。（共同研究者）